

あの遺跡は今!

part 11

埋蔵文化財整理調査成果
中間報告会

◆ 総合解説 ◆

◇ホンモノをまなぼう!
—出土品展示解説資料—

- ◇ホンモノにさわろう!
—整理作業体験—
- ◇ホンモノにまなぼう!
—出土品レプリカアクセサリー制作—
- ◇整理調査成果中間報告
—出土品から見た近江の戦国時代—
(関津城遺跡、清滝寺・能仁寺遺跡)

平成22年8月22日(日)

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage

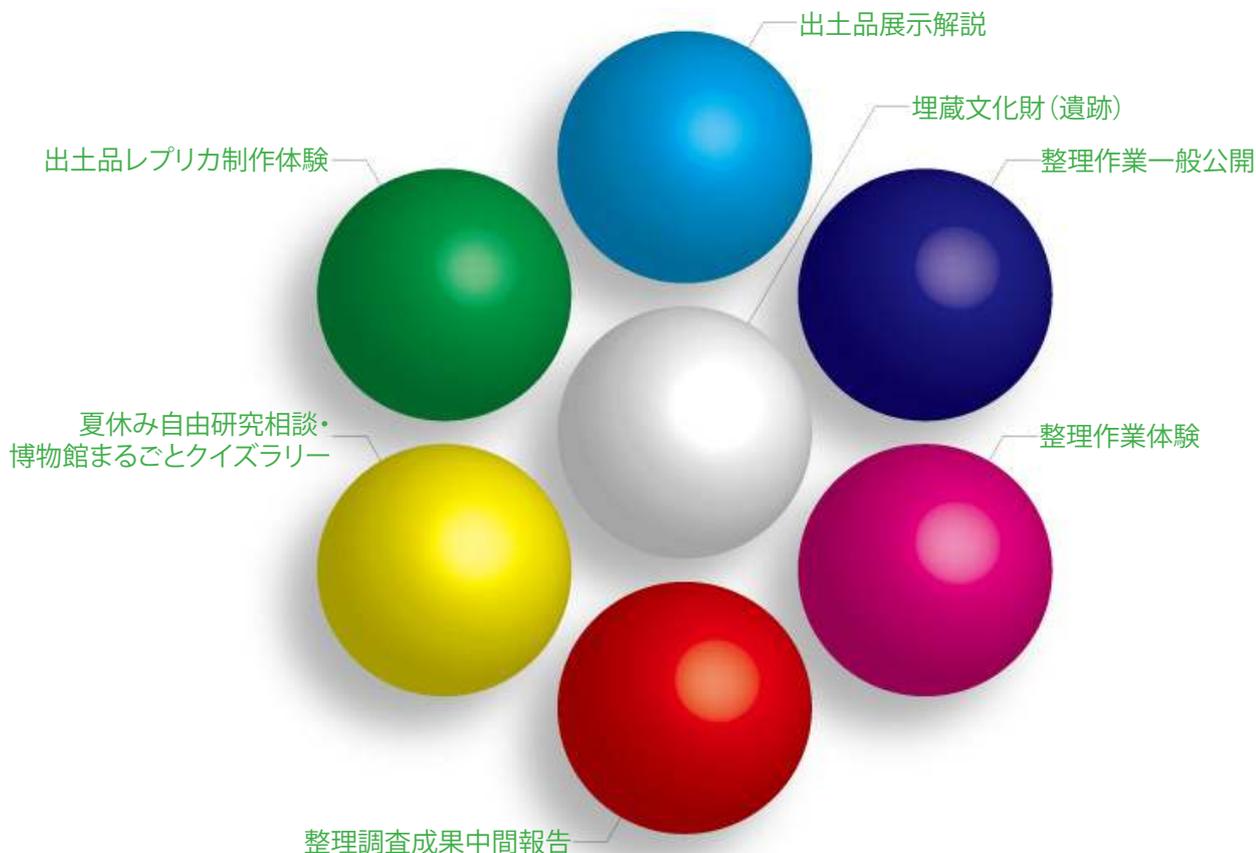
あの遺跡は今!Part11

埋蔵文化財整理調査成果中間報告会について

テレビや新聞などで毎日のように取り上げられている遺跡(埋蔵文化財)の発掘調査。財団法人滋賀県文化財保護協会では、発掘調査で得た情報を公開するために「現地説明会」を開催していますが、その後の整理調査のなかでも新たな発見があります。そこで、この成果をいち早く公開するためにこの催しを企画しました。

整理調査を通してわかった「あの遺跡」の「今」の情報を、6つのメニューでみなさんにお届けします。

この機会に埋蔵文化財の調査成果や出土品を間近で見学し体験していただくことで、より滋賀の歴史を体感し、文化財への親しみと理解を深めていただき、豊かな未来を創造していただければ幸いです。



遺跡の今の情報を6つのメニューでみなさんにお届けします

あの遺跡の“今”の情報を 6つのメニューでお届けします

整理調査成果中間報告

「出土品からみた戦国時代」と題して、米原市清滝寺遺跡・能仁寺遺跡と大津市関津城遺跡の整理調査の中間報告を行います。

- ◇10時～11時
- ◇14時～15時の2回

出土品展示解説

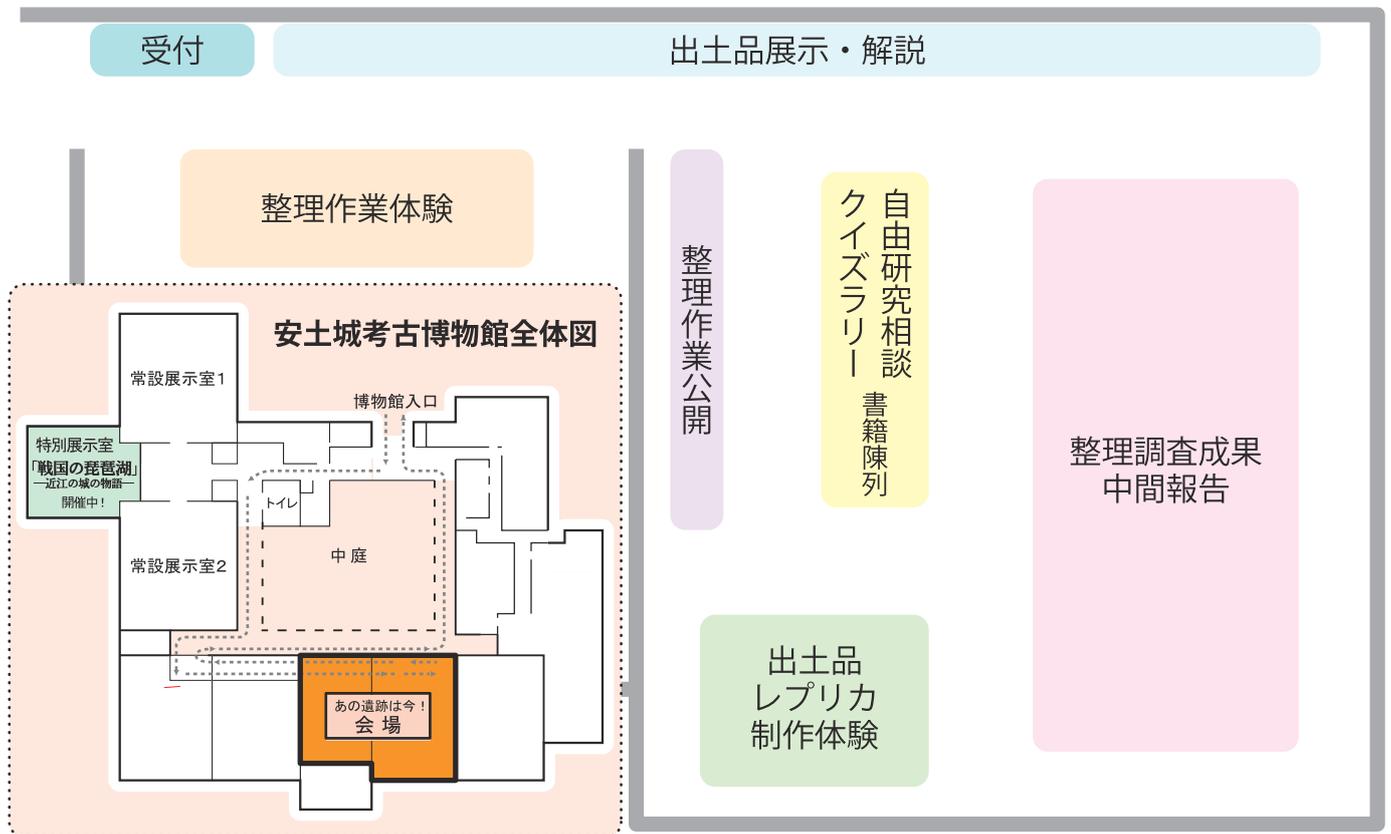
現在整理調査中の出土品を展示し、解説します。

- ◇主な遺跡
長命寺湖底遺跡、番場遺跡、上御殿遺跡・天神畑遺跡、塩津港遺跡、矢橋湖底遺跡、針氏城遺跡、清滝寺遺跡・能仁寺遺跡、関津城遺跡

整理作業体験

ホンモノの出土品にふれながら整理作業を体験していただくことで、出土品の「みかた」がわかります。

出土品の文様を写し取る「拓本」作業の体験では、できあがった拓本をお持ち帰りいただけます。



整理作業一般公開

ふだんは窓越しでご覧いただいている整理作業。本日は整理室を公開して作業の様子を間近にご覧いただけます。

出土品レプリカ制作体験

縄文土器の文様を題材とした施文体験と装飾品の制作の体験です。

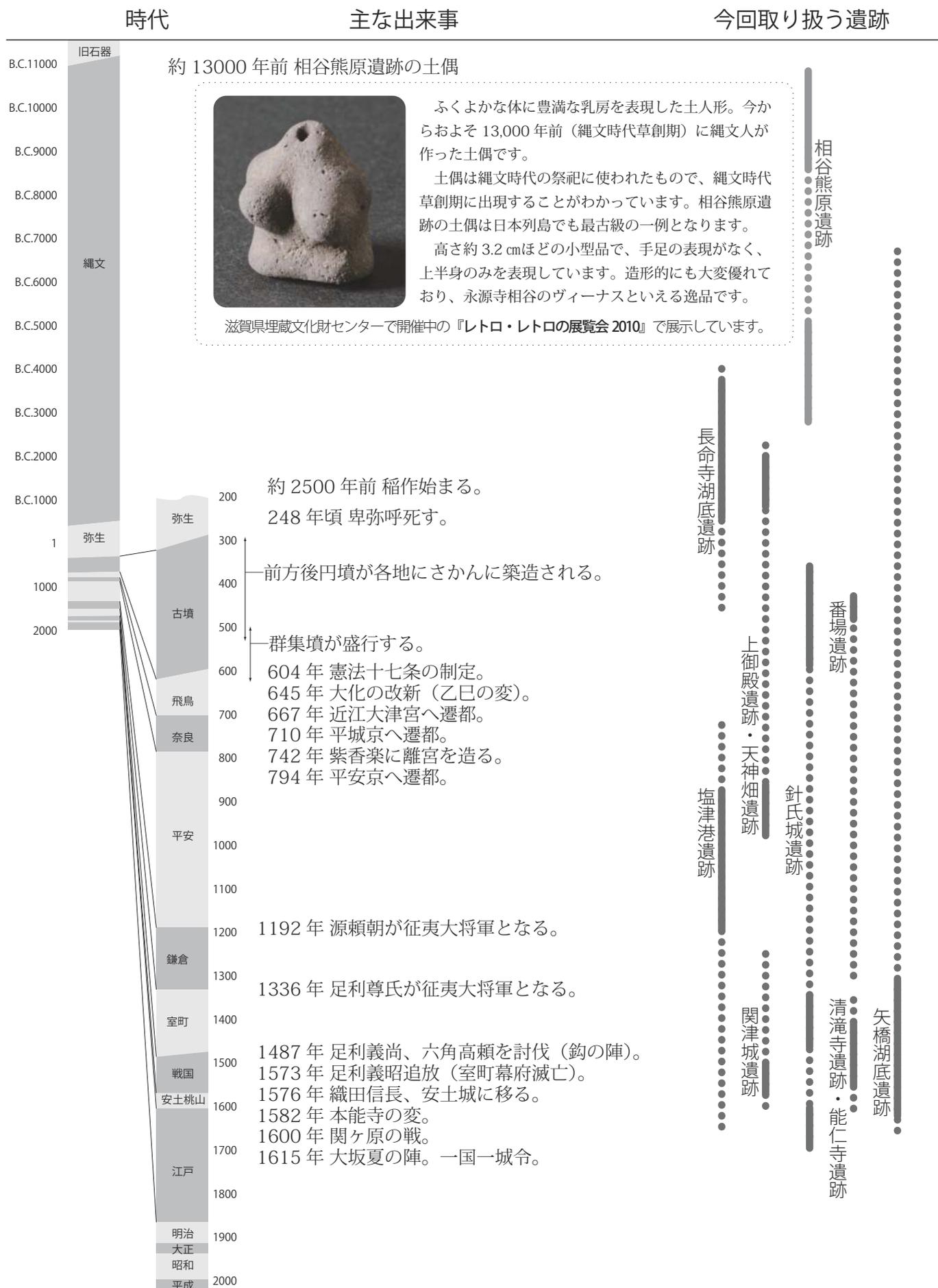
- ◇施文体験:油粘土への施文(無料)
- ◆制作体験:工芸粘土を使った装飾品の制作(材料費100円)

夏休み自由研究相談・博物館まるごとクイズラリー

専門職員が自由研究のお悩みをズバッと解決!

博物館の展示と連動した「博物館まるごとクイズラリー」は、自由研究のネタ探しに最適です。

大人とマニアも楽しく学べます。



長命寺湖底遺跡(近江八幡市長命寺町)



長命寺湖底遺跡の弥生土器

琵琶湖に特有の湖底遺跡。

昭和48年から平成3年にかけて行われた琵琶湖総合開発事業に伴う湖底遺跡の発掘調査と、その後の整理調査によって、湖底遺跡の実態が明らかになってきました。

そうしたなかから、今回は近江八幡市の長命寺湖底遺跡の弥生土器について紹介いたします。

長命寺湖底遺跡は、西国巡礼三一番札所である長命寺の前にある長命寺港付近の湖底に広がる遺跡です。付近の湖岸一帯には、湖底から波によって打ち上げられたと思われるたくさんの遺物が散布しており、遺跡の存在が推定されました。琵琶湖総合開発事業の一環として、長命寺港の改修工事が計画されたために、昭和57年度に湖底の状況を確認することを目的として試掘調査を行いました。その結果、水深2m程度の範囲を中心にして、たくさんの遺物が出土したため、同年度より発掘調査を行いました。

発掘調査は、調査範囲の周りに、鋼矢板を何枚も打ち込んで囲いをつかった後、内部の湖水をポンプで抜いて、湖底を陸化させることから始まりました。その後、湖底を上から掘り下げていきました。その結果、遺構は確認できませんでしたが、遺物を含んだ地層が幾層にも堆積している状況が確認できました。出土した遺物には、縄文晩期頃の土器や丸木舟、弥生時代の土器・石器、古墳時代の土師器、古代から中世頃の土器・陶磁器類等が多数出土しました。

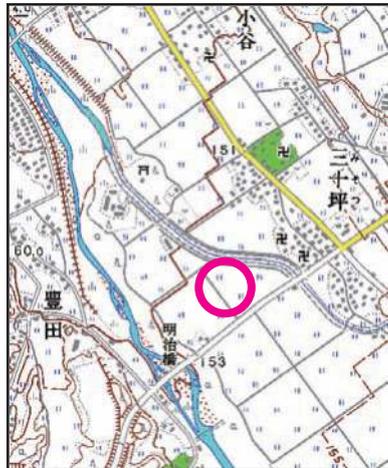
今回紹介する弥生土器は、弥生時代前期・中期前葉頃・中期後葉頃の各時代にわたるものですが、なかでも中期前葉頃の土器が主体を占めます。土器の多くは破片となっていますが、表面の文様などの残り具合は非常に良好で、どこか遠くの集落から河川や湖岸流によって流されてきたと考えるよりも、出土した場所からさほど離れていない地点に、弥生時代の集落が存在したと考えるほうがよいようです。おそらく、周辺にあった砂州上か、あるいは長命寺側の丘陵斜面等に集落があったのでしょう。



調査地点の現在の様子

山頂に見えるのが西国巡礼三一番札所長命寺。出土した弥生土器の残り具合は良好であるため、周辺の砂州上もしくは長命寺のある丘陵斜面に弥生時代の集落があったと考えられる。

番場遺跡(蒲生郡日野町三十坪)



古墳時代の大型木製網代のデザイン

番場遺跡で見つかった網代は、幅約2~3cm・厚さ0.1cm未満の木材(スギ・ヒノキ・サワラ等の針葉樹か?)を薄くはいた板材を編み組んで板状に仕上げています(3枚越え・3枚潜り・1枚おくり)。

この編み方を細かく見ていくと、ある部材の位置で編み方が4枚越え・2枚潜りに変化していることがわかりました。おくり方もこの部材から逆方向になっており、本来はV字状のデザインであったと推定できます。

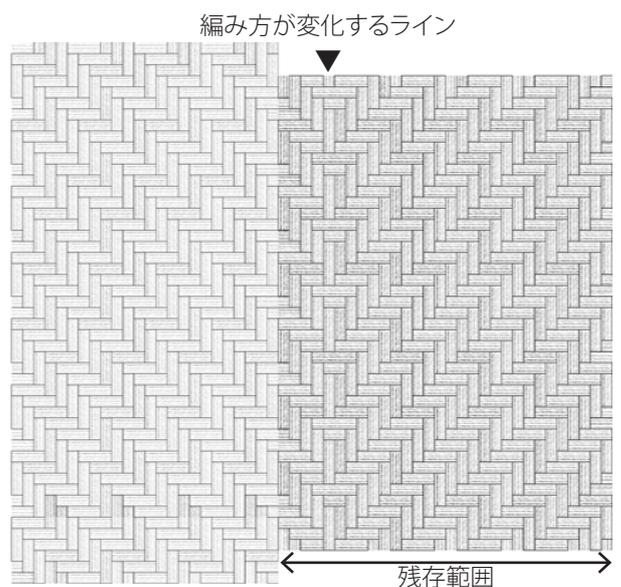
網代の残存規模は約120cm×90cmで、周縁部は欠損しており、本来の規模・形状は不明ですが、左右対称(シンメトリー)なデザインであったとすると、幅は160cm程度に復元できます。この幅は、ちょうど建物の柱と柱の間の長さに合ってきます。

網代は出土例が少なく、用途を断定するにはどれも決め手にかけるというのが現状ですが、古墳時代の当時の建物をかたどった家形埴輪には、網代を表現したと考えられるものがあり、屋根の棟覆いや外壁にこの表現がみられることから、これらの部分に利用されていたことがわかります。

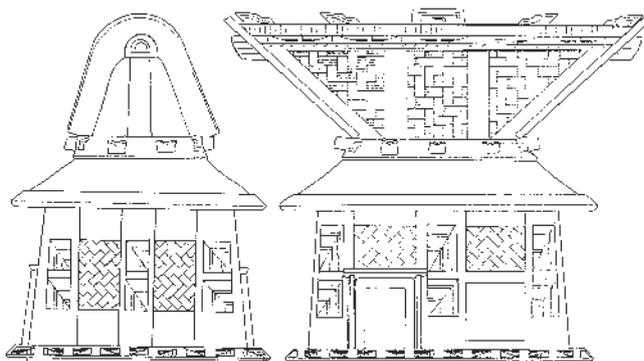
なかには壁の表現が綾杉文(平行する直線の間を交互に向きを違える斜めの平行線でうめる文様)となる例もありますが、これは番場遺跡の網代と同じ編み方の網代を表現したものなのかもしれません。



保存処理作業中の網代



網代復元模式図



網代の表現がある家形埴輪(京都府城陽市丸塚古墳)
 ※宮本長二郎1996『日本原始古代の住居建築』より転載

上御殿遺跡・天神畑遺跡(高島市鴨・高島市安曇川町三尾里)



天神畑遺跡・上御殿遺跡で出土した鉄鉱石

今回、ご紹介するのは、平成21年度の発掘調査で見つかった鉄鉱石を納めた穴についてです。

この穴は径1.5m程度の大きさで、内部に鉄鉱石が納められていました。鉄鉱石は収納用コンテナ約9箱分が見つかりました。詳細な成分の分析はこれから実施する予定ですが、今のところ比較的不純物の少ない良質な鉄鉱石が多いことが分かっています。

この遺構の時期については、残念ながら、土器と一緒に出土しておらず、現時点で確定できていません。穴と重複するように平安時代終り頃と思われる掘立柱建物が見つかり、その建物と関連する可能性もありますが、検討の余地を残しています。

上御殿遺跡と天神畑遺跡は、高島市南部の平野に位置する遺跡です。遺跡の範囲内で河川改修工事が計画され、平成19年度に試掘調査を実施したところ、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物を検出したために、平成20年度から発掘調査を続けています。昨年度には、中世のこけら経について、皆様にお知らせすることができました。

今回のように、製鉄の材料である鉄鉱石を多量に納めた穴が見つかることは、滋賀県内でもほとんどなく、大変珍しい事例です。高島郡内には、旧マキノ町域を中心として、奈良時代の製鉄遺跡群の存在が知られています。また、奈良時代の歴史書である『続日本紀』には、当時の最高権力者である藤原仲麻呂に、浅井郡と高島郡の「鉄穴」各二処を与えた、という記述があります。「鉄穴」の意味については諸説がありますが、鉄鉱石の鉱山とみる意見が多いようです。そうすると、高島郡内には、鉄鉱石の鉱山があるとともに、そこから採取した鉄鉱石によって製鉄が盛んにおこなわれていたことが分かります。

今回の調査で見つかった鉄鉱石をおさめた穴については、所属時期を確定する必要がありますが、こうした高島郡内での古代の製鉄活動と関連する可能性が濃厚といえます。これからの整理調査で残された課題の解決を図っていきたいと考えています。



鉄鉱石を納めた穴



納められた鉄鉱石の厚さ



穴の断面

塩 津 港 遺 跡 (長 浜 市 西 浅 井 町 塩 津 浜)



植 物 質 繊 維 製 品 の 保 存 処 理

塩津港遺跡からは植物質の繊維から作られた網代や注連縄、円座しめなわが出土しています。これらの遺物は、地下水の豊富な埋蔵環境の下で残っていましたが、いずれも腐食が進んでいたため、現場での安全な取り上げと恒久的な保存処理を実施しました。

網代をはじめとするこれらの植物質繊維製品は、塩津港遺跡における当時の祭祀に使用したと考えられる大変貴重な遺物です。今後、資料の保管と活用が望まれます。

網代の具体的な形はわかりませんが、木を細長く割った素材をていねいに編み上げたものです。

現状の形のまま取り上げるために、網代の形を支えている土ごと切り取って取り上げることにしました。

円座は植物繊維を丸い形に編み込んだ製品で、網代と同様に地中に埋もれている間に劣化が進行し強度が低下していました。

そのため単独で取り上げるのは危険が伴うため、まず柔らかい紙を水張りして遺物を養生しました。

さらに合成樹脂で保護型を作り円座を支える土ごと切り取るようになりました。

また、注連縄しめなわは繊維が解体しないように注意して取り上げ、保管中も形が崩れないよう取り扱いました。

植物質繊維製品は、出土遺物の中でもとくに脆弱な資料です。繊維が崩壊することをさけるため、基本的にPEG含浸法により遺物を支えている土を含めた全体の強化をはかる処置を実施しました。



網代



円座



注連縄



やわらかい和紙で保護する



合成樹脂で保護型をつくる



周囲の土ごと取り上げる



反転直後の状況

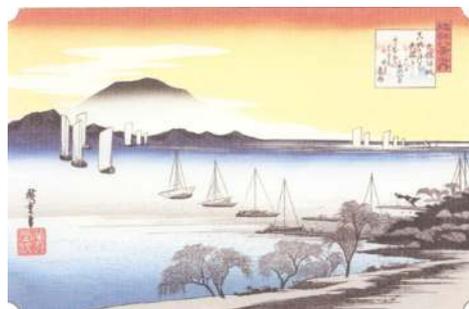
矢橋湖底遺跡(草津市矢橋町)



煙管(キセル)ー港には船頭の煙管がお似合い?ー

「煙管」は、刻み煙草を吸うための道具で、語源はカンボジア語でパイプを意味するクシエルに由来すると言われています。では、日本では、いつ頃から喫煙の文化が始まり、ひろまったのでしょうか。どうやら16世紀中頃にポルトガル人によって持ち込まれたようで、慶長17年(1612)には徳島でタバコの栽培が始まっています。大阪城等の城跡や城下町などからも数多く出土しており、武将やその奥方が喫煙という新しいトレンドをいち早く取り入れていたようです。

近江では、「水口煙管」が江戸時代初頭から有名で、東海道の名物土産として全国に知られていました。喫煙文化は武将や武家だけではなく、庶民にも急速に波及・浸透し、客待ちの船頭が「ちょっと一服」と言う構図は、浮世絵にも描かれ、歌舞伎や芝居でも粋な小道具として登場します。



近江八景「矢橋帰帆」

煙管は、パイプ状の羅字(ラオ)に竹材、吸口・雁首に真鍮や赤銅などの金属を使って作られており、比較的残りやすい金属部分が発掘調査によって出土します。近江八景の「矢橋帰帆」でも有名な矢橋港を含む矢橋湖底遺跡から出土したのは、真鍮製の吸口と赤銅製の雁首です。残念ながら矢橋湖底遺跡からの出土品は地元の名産品である水口煙管ではありませんが、船上から湖中への落とし物のようです。琵琶湖を行き交う帆船を操る人たちや旅人を対岸の石場の港まで運ぶ渡し船の船頭が、仕事の合間や客待ちに一服、あるいは渡し船にのった客が景色に見とれながらの一服に使っていた煙管かも知れません。

矢橋湖底遺跡の他に、長命寺湖底遺跡、多景島や唐崎遺跡などの港や景勝地周辺の湖底から煙管が出土していることから、煙管は江戸時代における琵琶湖の港の景観には欠かすことのできない小道具の一つと言えます。

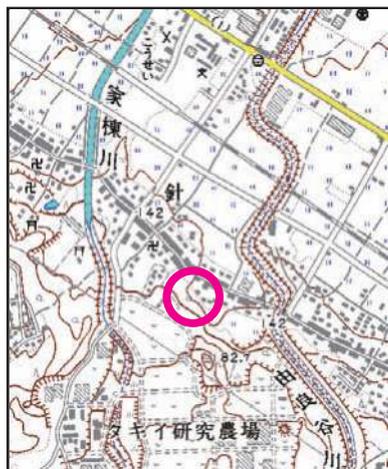


矢橋湖底遺跡出土の煙管



浮世絵に描かれた煙管をくわえる客待ち船頭

針氏城遺跡(湖南省針)



甲賀五十三家 針氏の居城

東海道に面した集落から太留麻大明神へと続く里道は、周囲から若干くぼんだ地形となっていました。調査の結果、この箇所は幅約4m・深さ約1.5mの堀であることがわかりました。

ここからは土師器の小皿や信楽焼すり鉢など、針氏城があったとされる15世紀頃の土器が出土しています。

土師器の小皿は堀底近くでまとまって出土しました。すり鉢などその他の遺物は割れているものばかりで、堀に捨てられたものと考えられます。

また、この堀から東へ約30m離れたところでも同じような形態の堀が見つかっています。二つの堀にはさまれた部分には、江戸時代の瓦や陶磁器が捨てられた大きな穴がありましたが、針氏城に関係する建物跡等は見つけることはできませんでした。

針氏城は、『江州佐々木南北諸氏帳』・『芥川氏正徳二年自記 甲賀古土之事』※に針和泉守の名と針村住とあることから、針和泉守の城であったと考えられています。

湖南省域には、針氏城や針城をあわせて23か所の中世城郭が分布しています。これらは野洲川兩岸の丘陵に、主要交通路である東海道・信楽越えや野洲川を眼下に見渡すことができる立地に築かれていることが特徴です。

文献資料などから城主が比定されている城郭が多いなかで、発掘調査で遺物が出土したのは夏見城に次いで2例目です。今後の整理調査では、出土した遺物を詳細に検討することで、針氏城の存続期間等を明らかにする必要があります。



信楽焼すり鉢出土状況



土師皿と瓦質土器



土師器の小皿

※『江州佐々木南北諸氏帳』・『芥川氏正徳二年自記 甲賀古土之事』

長享元年(1487)9月、室町幕府將軍足利義尚は近江守護六角高頼の征伐に際し、鈎安養寺(栗東市安養寺)に陣を敷いた。六角氏はこれを攻めるにあたって甲賀地侍の援助を請い、これに参陣した五十三家が記載され、このうち二十一家は特に功績を認めて後に感状を与えられたと記されている。

清滝寺遺跡・能仁寺遺跡(米原市清滝)



京極氏関係遺跡

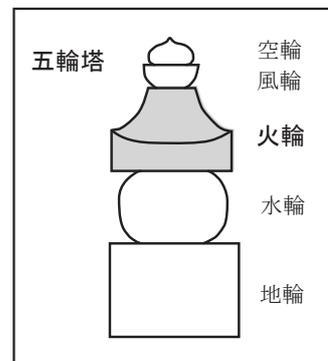
調査では、造成された平坦地を確認し、その上に掘立柱建物や井戸、溝などが見つかりました。これらは、出土遺物から、京極氏が権勢を誇り活躍した室町時代後半の頃のものとして推定されます。

見つかった遺構には石が多用されていました。たくさんの重い石を運搬する工事を成し得た、京極氏の力の大きさや宗教観が偲ばれます。

調査で見つかった井戸は、五輪塔の火輪のみを円形に積み重ねて井戸枠にしており、大小50個近くの火輪の下面を井戸の内側にそろえ、巧みに組み合わせています。

五輪塔は下から方形・円形・三角形・半月形・宝珠形の5つの形を積み上げた供養塔で、平安時代に「地・水・火・風・空」を宇宙生成の五大要素とする仏教思想から始まりました。ほとんどは石造物で、まれに木製、金属製、泥製、水晶製のものもあります。

井戸に用いられていた火輪は全て石製で、大きさや形に違いがあるほか、風化の著しいものから新品同様のものまであります。また、石材も複数の種類があり、大半が白っぽい目の粗い花崗岩ですが、なかには青みを帯びてキメの細かい砂岩や湖東流紋岩も含まれており、多方面から集められていることも推測されます。こうした違いは、五輪塔の製作や運ばれてきた背景などを考える上で、重要な情報といえます。

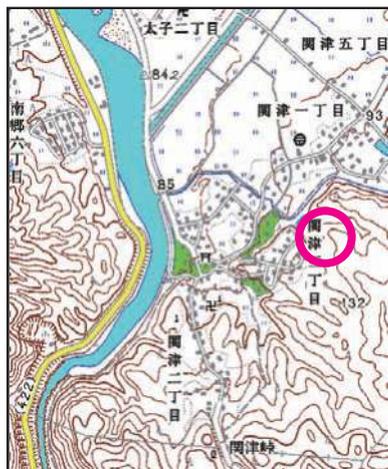


五輪塔の各部名称



大きさや石材が異なる五輪塔火輪

関 津 城 遺 跡 (大 津 市 関 津 三 丁 目)



戦 国 期 の 屏 風 の 飾 金 具

出土した銅製の飾金具は、長さ200mm・最大幅16mm・最大厚3mmの板状で、重さは55.5gです。両端部は花頭状で、端部から31mmの箇所には直径3mm弱の釘打穴があり、片方には銅釘が残っています。周縁には細い沈線が刻まれ、両端の釘打穴を5等分する箇所には五三桐が縦に向きを揃えて刻まれています。

沈線と五三桐の間には、円筒状工具による粟粒ほどの大きさの魚々子が彫金されています。

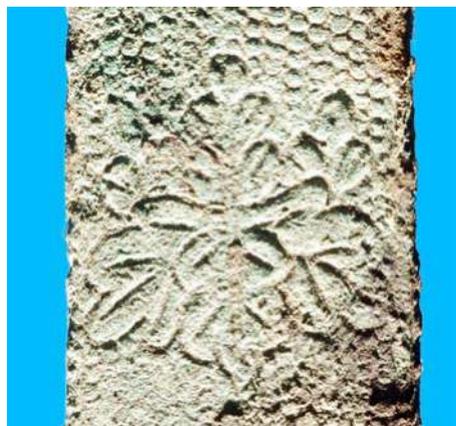
京都国立博物館の久保智康企画室長によると、表面には火災による煤が付着しているものの、精緻な装飾が施されていることが観察でき、本来は鍍金(金メッキ)がされていたであろうとのことでした。

形態的には屏風の枠を飾る「押縁」で、銅の板を槌で叩いて形をつくる鍛造技法で成形されているようです。

また、彫金の技法としては、慶長期(1596～1615年)にみられるもので、現存例としては大津市園城寺勸学院(慶長5年・1600年に再建・国宝)を飾る、狩野光信による障壁画(重要文化財)の飾金具とよく似ているそうです。

飾金具が出土したのは、関津城の3つの曲輪のうちでもっとも広い西裾の曲輪です。この曲輪は約30m四方の規模で、調査は東側約1/4部分でしたが、焼土や炭に覆われて礎石建物や溝などがみつけられました。飾金具は北端にある礎石建物の検出作業中に出土しましたが、今年度の調査ではこの建物には時期差があることが判明しています。大甕を埋設した酒や油などの液体を貯蔵する倉庫から、礫を敷く一回り小さい建物へと建て替えられたようです。

この他にも銅製飾金具や陶磁器類など、さまざまな遺物が出土しています。桐文の屏風金具が出土したこともあわせて、関津城が果たした役割を考える大きな手掛かりとなりました。



「押縁」の全形と桐文



参考：五三桐



展示解説した遺跡の概要

① 長命寺湖底遺跡



- ・調査年度:昭和57・58年度
- ・調査原因:琵琶湖総合開発
- ・概要:縄文時代後期から弥生時代にかけての遺物が散布する湖底遺跡である。発掘調査では縄文時代後期の琵琶湖汀線を確認し、丸木舟が出土した。この丸木舟の保存処理は当時県内初の事例であった。

② 番場遺跡



- ・調査年度:平成20年度
- ・調査原因:国道477号改築
- ・概要:古墳時代中期の旧流路から、土師器や木製品とともに大型の木製網代が出土した。土器には小型のものやミニチュア土器が多数含まれており、水辺の祭祀に関わるものと考えられる。

③ 上御殿遺跡・天神畑遺跡



- ・調査年度:平成20年度
- ・調査原因:青井川改修
- ・概要:弥生時代末の方形周溝墓、平安時代後期の掘立柱建物、平安時代から室町時代の旧流路が見つかった。旧流路には縄文時代から室町時代にかけての遺物が含まれており、なかでも柿経は「見せ消ち」が確認できたものとしては全国初のものである。

④ 塩津港遺跡



- ・調査年度:平成18～20年度
- ・調査原因:大川改修
- ・概要:平安時代後期から末期にかけての神社跡がみついている。約50m四方の堀で囲まれ、本殿・拝殿・門・井戸・鳥居などを検出した。堀の中からは起請文木簡や幣串・円座などのほか、神像が5体出土した。

⑤ 矢橋湖底遺跡



- ・調査年度:昭和56・60年度
- ・調査原因:琵琶湖総合開発
- ・概要:発掘調査では縄文時代から江戸時代にいたる各時代の遺物が出土している。室町時代後期の連歌師宗長が詠んだ「もののふの矢橋の船は速かれど急がばまわれ瀬田の長橋」の矢橋は当地このとで、中世以降湖上交通の拠点として栄えた。

⑥ 針氏城遺跡



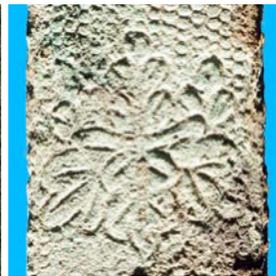
- ・調査年度:平成21年度
- ・調査原因:ほ場整備(農道)
- ・概要:古墳時代後期の竪穴住居や室町時代の堀が見つかった。竪穴住居は隣接する狐栗古墳群より時代的にはやや先行する。室町時代の堀は針氏城に関連するものである。

⑦ 清滝寺遺跡・能仁寺遺跡

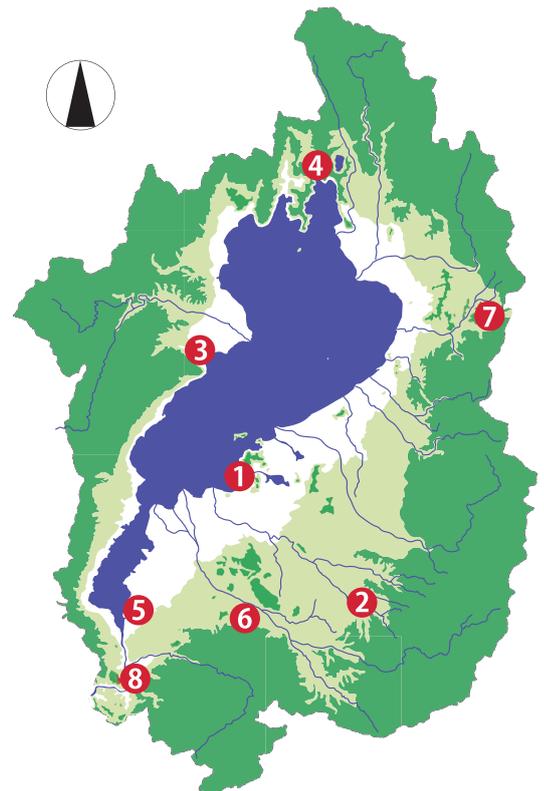


- ・調査年度:平成20・21年度
- ・調査原因:能仁寺川防犯工事
- ・概要:調査地は京極家の菩提寺である清滝寺徳源院の南隣で、平坦地をつくるための大がかりな造成を確認した。平坦地には室町時代後半頃の掘立柱建物・井戸・溝が見ついている。

⑧ 関津城遺跡



- ・調査年度:平成21年度
- ・調査原因:国道422号改築
- ・概要:関津峠と瀬田川に隣接する交通の要衝に位置している。土塁に囲まれた曲輪は3か所あり、虎口には櫓台や門が見ついている。礎石建物や土蔵が見ついており、鎧の一部や銅製装飾品、炭化した穀物などが出土している。



■ 新刊図書のご案内 ～シリーズ近江の文化財～ ■

県内の遺跡の解説書ができました。オールカラーで写真やイラストを豊富に掲載しています。コンパクトなB5判ですので、現地探訪のお供にぴったりです。



シリーズ近江の文化財 001

甲賀郡中惣の世界 ―神と城そして武士―

(財)滋賀県文化財保護協会
2010年8月
ISSN 2185-3533
定価 600円

戦国乱世の甲賀に問題を解決するための手段として武力ではなく合議を採用した集団があった。「甲賀郡中惣」である。彼らの活動の有様を「城」と「忍者」から説き起こす。



シリーズ近江の文化財 002

関津遺跡 ―近江の南の玄関口―

(財)滋賀県文化財保護協会
2010年8月
ISSN 2185-3533
定価 600円

『続日本紀』に記載された「田原道」の発見で一躍注目を浴びた関津遺跡。水陸交通の結節点としての遺跡の重要性が各時代で認められた。関津遺跡の発掘成果から日本の歴史を垣間見る。

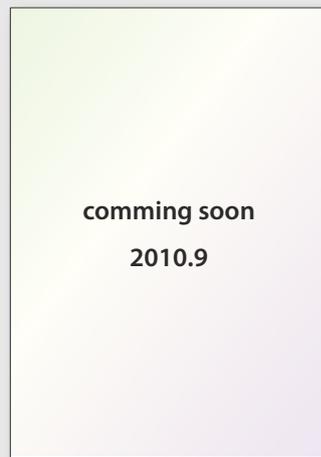


シリーズ近江の文化財 003

琵琶湖の港と船

(財)滋賀県文化財保護協会
2010年8月
ISSN 2185-3533
定価 600円

古来日本列島の交通の要であった琵琶湖。日本史上琵琶湖の水運が果たした役割は極めて大きい。今あらためて琵琶湖の港と船を手掛かりに琵琶湖水運の実態を説き起こす。



シリーズ近江の文化財 002

縄文人の エコロジーとエコノミー 琵琶湖の貝塚・ 粟津湖底遺跡が語る秘密

(財)滋賀県文化財保護協会
2010年9月
ISSN 2185-3533
定価 600円

■ ホームページのご案内 ■ <http://www.shiga-bunkazai.jp/>

財団法人滋賀県文化財保護協会では、文化財保護のための普及活動として、文化財に関する展示会(発掘調査埋蔵文化財展、成果展等)の開催や、出版物の刊行、体験イベント等を実施しています。最新の情報はホームページに随時掲載しています。

ホームページでは、定番から知る人ぞ知る隠れたスポットまで、おすすめPointを交えながら紹介する『新近江名所図会』や、エピソードを交えながらおススメの逸品を解説する『調査員のおススメの逸品』など、連載読み物も盛りだくさんです。ぜひ一度ご覧ください。